

一、はじめに

かつて折口信夫は、女房に巫女の要素を説き、平安時代の女房中心の宮廷文学誕生の背景を読み解いた^{〔注1〕}。また、玉上琢彌は、『源氏物語』を「女のために女が書いた女の世界の物語」^{〔注2〕}と評し、作品内外の女房を中心とした物語音読論を展開した。作家論と相まって物語世界と読み手を繋ぐ存在である女房は、源氏物語研究の一端へと組み込まれ、研究対象としての価値を高めた。そして、めしうどの侍女の語りが女主人と男たちの隠された欲望を暴き立てていくことを論じた三田村雅子氏の身体論^{〔注3〕}や乳母や乳母子から物語を読み解いた吉海直人氏の乳母論^{〔注4〕}、さらに、近年では複数の侍女視点の介在によって織りなされるテキスト分析を実践している陣野英則氏の語り手論^{〔注5〕}は、女房研究を更なる水準へと押しあげている。加えて、書名に女房、侍女を冠した外山敦子氏の『源氏物語の老女房』（新典社、平成十七年）や古田正幸氏の『平安物語における侍女の研究』（笠間書院、平成二十六年）、千野裕子氏の『女房たちの王朝物語論』『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』（青土社、平成二十九年）などの刊行は、女房論の隆盛を物語っている^{〔注6〕}。誰が語っているのか、どのように語っているのかという物語論と女房研究は見事に融合し、女房を通して物語は何を語ろうとしたのかを究明する女房論としての地位は築かれた。

こうした女房研究、女房論の展開、隆盛に比して、同じ伺候者という枠組みで考え

た際、男性である従者研究はまだまだ黎明期である。従者研究のアプローチとしては、受領^{〔注7〕}、家司・家人^{〔注8〕}といった男性官人としての側面からなされることが多く、男性社会と物語内での語られ方の有機的結びつきが明らかにされてきている。『源氏物語』に語られる従者を人物論に終始するのではなく、従者への語りが切り拓いていく物語論の展開が今後求められる。そこで、まず従者という存在を体系的に捉える必要性から、本稿では、従者を含む男性伺候者を取り巻く表現機構を読み解き、そこからいま見られる語りの方法や〈読者〉^{〔注9〕}のあり方を明らかにしていくことの序章としたい。

二、学術用語としての従者

従者は、平安朝のかな作品においては、「ずさ」と表現される。源氏物語研究において、従者とは、広く受領層を中心とした男性伺候者を意味し、侍女ないし女房など女性伺候者と対の学術用語として使用され、女房と従者という区分でこれまで論じられてきた^{〔注10〕}。

特に、光源氏の須磨流離や匂宮の宇治行きなどで多く語られる惟光や時方が取り上げられ、包括的に従者と言われてきた。女房と従者という分かりやすい二項対立の学術用語として、男性伺候者＝従者が定着しているようであるが、果たしてそれでいいのかまず疑問を呈したい。加えて物語は「従者」をどのような語りに取り込んでいる

のか、見直す必要があると考える。

そこでまず、テキストの特性ではなく、「従者」という表現思想・認識・方法を探るべく平安朝のかな作品と公卿日記を追ってみた。結果から述べると、従者≡男性伺候者という限定的なものではなく、男女ともに使用される無性差かつ受領にも入らないかなり下層の者を指す表現であることが明らかになった。たとえば『うつほ物語』では、父母さらには乳母を喪った俊陰女の様子を語る場面を見ると、女の従者が語られる。

かかるほどに、娘十五歳なる年の二月に、にはかに、母隠れぬ。それを嘆くほどに、父病づきぬ。…〔中略〕…と遺言し置きて、絶え入り給ぬ。又、同じ頃をひに、乳母も亡くなりぬ。心と身を沈めしほどに、殊に身の徳もなく久しくなりにしかば、まして、一人の使ひ人も残らず、日に従ひて失せ滅びて、ものの心も知らぬ娘一人残りて、もの恐ろしく慎まなければ、あるやうにもあらず、隠れ忍てあれば、へ人もなきなめり」と思ひて、よろづの往還の人は、屋戸どもも毀ち取りつれば、ただ寝殿の一つのみ、簀子もなくてあり。ほどもなく野のやうになりぬれば、娘は、ただ、乳母の使ひける従者の、下屋に曹司ゝてありけるをぞ、呼び使ひける。…〔中略〕…世の中も知らぬ若き心地に、いとあはれに悲しく、春は花を眺め、秋は紅葉を眺めて明け暮らすに、ただ、この女の食はすれば食ひ、食はせねば食はであり。

（俊陰「二二・二三頁」〔注11〕）

経済的精神的支えを失った俊陰女は、「心と身を沈め」た状態である上に「一人の使ひ人も残らず」とただ独り邸に取り残されていた。それだけではなく、屋や戸、簀子など住空間を剥ぎ取られた俊陰女は、「野のやう」になり、ようやく「乳母の使ひける従者」を呼び寄せて使役するのであった。独り残された俊陰女は、精神的なものから物質的なもので剥ぎ取られていくことが語られる。こうした姫君の極限状態を語る中で、俊陰女は「乳母の使ひける従者の、下屋に曹司してありけるをぞ、呼び使ひ

ける」のである。物語の視線は、住空間のもっとも外延に位置する下屋の曹司に住まう従者へと注ぐ。語り手は俊陰女の住空間を「二人の使ひ人も残らず」と語っていたが、行く当てもなかったのか「下屋に曹司」する乳母の従者であった女（後文から嫗と判る）はいた。この女は、俊陰女が「使い人」にも数えないような下賤の者であり、「ただ、この女の食はすれば食ひ、食はせねば食はであり」という表現は、生きる延びるための最終手段であり、屈辱的な状況を物語っている。ここで語り出される従者とは、主人が極限状態に陥ったときに語られるような卑賤の存在なのである。

また、『大和物語』や『枕草子』などにも、女の従者が語られている。

右馬の允藤原の千兼といふ人の妻には、としこといふ人なむありける。子どもなどあまたいできて、思ひて住みけるほどに、亡くなりければ、かぎりなく悲しとのみ思ひありくほどに、内の蔵人にてありける一条の君といひける人は、としこをいとよく知れりける人なりけり。かくなりにけるほどにしも、とはざりければ、へあやし」と思ひありくほどに、このとはぬ人の従者の女なむあひたりけるを見て、かくなむ。

（十三段『大和物語』二六三頁）〔注12〕

『大和物語』では、はつきりと女と語られている。内の蔵人である一条の君に使われている従者に、男は手紙を託す。内の蔵人は女蔵人のことなので、女房の従者ということになる。また、一五七段では下野国に住んでいた「男の従者、まかぢといひける童使ひける」とあり童を従者と表現している。次に『枕草子』でも女房の従者について記されている。

宮仕へする人をば、あはあはしう、わるきことに言ひ思ひたる男などこそ、いとにくけれ。…〔中略〕…女房の従者、その里より来る者、長女、御廁人の従者、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢ隠れたりし。

（「生ひさきなく、まめやかに」『枕草子』三七頁）〔注13〕

『枕草子』も『うつほ物語』同様に、従者が女とは書かれていないが、「女房の従者」

とそれに続く女官たちの列挙から女の従者であると考えられる。女房に加えて長女や御厠人など下級女官までも従者がいることが記されている。『枕草子』には侍女に仕える従者の存在が散見する。それは、清少納言を含め女房集団に仕える従者が身近な存在としていたからであろう。

また、男性の視点に注目してみると、『御堂関白記』長和二年（一〇一三）十月十二日条では、「於後涼殿馬道下、夜部女方従者女、髪被切」と女房（Ⅱ女房）の女従者が夜に髪を切られるという事件を記している^{〔注14〕}。馬道の下に女従者がいたということは、廂に上がることを許されていない下人であろう。また、長和二年（一〇一三）十二月二十四日条では、「中宮少進藤原惟信被突十七所、従者男即死了」と藤原惟信が十七箇所刀傷を負いその翌日に亡くなったことが記されるが、従者の男は即死だったらしい。主人を守ろうとした従者は、その場で致命傷を負って命を落としたと想像される。『小右記』長元四年（一〇三一年）七月二十日条では「為資朝臣傳小一条院仰云、院牛付従者与家牛童従者鬪乱」と小一条院の牛付きの従者と藤原実資の牛童の従者が乱闘したことが記されている。実資は、『小右記』にしばしば小一条院の従者の暴力沙汰を記しており、そうした行動は延いては主人である小一条院の凶悪さと残忍さにも繋がっていく^{〔注15〕}。『小右記』に記される従者を見ると、盗みや暴力行為を行い縦横無尽に動き回っている印象を受ける。そうした従者の多くは、貴族層に属さないいわゆる民衆であり庶民であった。平安京に暮らす成人庶民の多くは、貴族や朝廷のために働く者が多数であり、繁田信一氏は、牛飼童などを務める庶民を王朝貴族の従者と指摘する^{〔注16〕}。

ここまで確認してきて、従者と呼ばれる者たちは、貴族層とは程遠い（受領にもなれない）身分が低く雅とはかけ離れた庶民であり、主に中下級貴族に伺候する者たちを指す表現と考える。従者の役割は、明確に与えられているわけではなく、さまざまな雑事に従事しているようである。女房と呼ばれる者たちは、多くが受領層の娘の中下級貴族であり、自邸に戻れば主人として扱われ、自分たちにも伺候する者たちがいることは、『紫式部日記』などからも窺うことができる。貴族に直接伺候する者たち

を上層伺候者するならば、従者と呼ばれる者たちは下層伺候者と位置づけられよう。つまり、「ずさ」「従者」と呼称される者たちは、庶民が生きる術のひとつとして選択した下層伺候者という立場と言えよう。

三、『源氏物語』に語られる従者

都を中心とした上流貴族の生活空間を中心に語る正編世界に「従者」の用例は見出すことができない。それは前節で述べたように、「従者」が下層伺候者であることを考えれば納得されよう。光源氏にとって耳慣れない庶民の生活は「そそめき騒ぐ」とあやしうめざましき音なひ^{〔一〕}（夕顔「一五六頁」）であり、彼らの声は鳥のように「さへぐりあへる」（明石「二三八頁」）ものとして、相手を認識する聴覚情報たり得ないのである。「従者」へと語りの視線が注がれるのは、宇治十帖に入ってからである。

薫をよそおって浮舟のもとへ闖入した匂宮の行為によって、匂宮、薫、浮舟、右近（浮舟の侍女）それぞれの関係性は複雑なものへと展開していく。特に語りの中心にあるのは、匂宮の浮舟への想いと行動、それに呼応する右近の動き（苦悩）である。

かしこには、石山もとまりて、いとつれづれなり。御文には、いとみじきことを書き集め給て遣はす。それだに心やすからず、時方と召しし大夫の従者の心も知らぬしてなむやりける。「右近が古く知れりける人の、殿の御供にてたづね出でたる、さらがへりてねむごろる」と、友だちには言ひ聞かせたり。よろづ右近ぞ、それともしならひける。^{〔注17〕}

浮舟との情熱的な契りに「時の間忘れず思し出づ」状態の匂宮は、その想いを手紙にしたためた。それ続く前掲の文脈では「それだに心やすからず」とあり、手紙の使者から露見することを危惧し、「心も知らぬ」「大夫の従者」が選出される^{〔注18〕}。ここでの「心」は情趣などではなく、二人の深い事情と解すべきであろう。従者の主人で

ある時方は、勾宮の家司で、のちに出雲権守と明かされる受領層出身の上層伺候者である。手紙の使者に名もなき下層伺候者である「従者」が語られるのは、右近の視点に近似した語りの文脈だからだと考える。右近が仕える宇治の邸は、先日（注18）の勾宮逗留により「石山もとまりて、いとつれづれなり」という侍女たちの鬱屈とした雰囲気であった。そのような中、外からの使者となれば侍女たちは過敏な反応を示すであろう。「友だち」の侍女集団に対して「殿の御供」という右近の「そらごと」は、勾宮の存在と自身の過失を隠匿しようとする心の作用である。このような、侍女の心理を中心に据えた人間関係の語りは、宇治空間の特徴といえよう。宇治空間では、貴族たちの訪れによって乱された日常を、受領層の上層伺候者たちが人間関係の均衡を保つため奔走するさまが語られる。

次の従者の例も、同じ浮舟巻である。浮舟に会いに来た勾宮一行は、宇治の邸の警備の厳重さに驚く。

葦垣の方を見るに、例ならず、「あれは誰ぞ」といふ声々いざとげなり。立ち退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。さきさきのけはひにも似ず。わづらはしくて、「京よりとみの御女あるなり」と言ふ。右近は従者の名を呼びて会ひたり。
（「浮舟」一八八頁）

ここでは、浮舟の侍女右近の従者の名が価値ある情報として語られている。宇治のよ
うな都から離れた周縁の空間では、上層伺候者である時方や右近よりも下層の者たちの動きまでも視線が注がれる。浮舟の邸の者たちに気づかれ、その場を「立ち退いた時方に代わって語り出される「心知りの男」は、先の時方の従者であろう。従者は、「心も知らぬ」者から「心知りの男」へと浮舟物語に組み込まれたのである。また、この従者は「劣りの下衆」（一七〇頁）と語られるが、このような下層伺候者たちが、物語の人間関係を構築していく語りに組み込まれていくのは、宇治空間の語りが伺候者層の〈読者〉を強く意識しているからではないかと考える。つまり、宇治空間の語

りは貴族層だけではなく、伺候者層までも取り込んだ位相にあるのではないだろうか。

また、「従者」という表現記号に注目するならば、宇治十帖において語りの位相が最も低いのは浮舟巻であると言えよう。勾宮の伺候者である時方や道定の奔走が語られる浮舟巻と司召との関係性を野村倫子氏は指摘しているが、受領層にとつての司召は一大事であり、これは浮舟巻と男性伺候者への語り（己の実力をアピールする場である儀式と男性伺候者の関係）を考える上で大変示唆的な指摘である（注19）。

「従者」の類似表現として「下人」「下衆」「賤の男」などがある。こうした表現について、神尾暢子氏は光源氏の「落胆の極み」「悲哀」に共感する存在として指摘している（注20）。光源氏の心の状態がかつてないほどに下方に向かったとき、みやびな日常からは隔絶した者たちが顔を見せ、彼らの共感が語られる。しかし、そうした語りは翻ってそこから這い上がる力となつて、再びみやびな日常へと光源氏を回帰させていく。もちろん、こうした下賤の存在への語りは、みやびな貴族世界を志向する〈読者〉にとつては、早く脱却したいという〈読み〉の原動力へと作用していく。

三、人物呼称と実名

『源氏物語』は、帝をはじめ男君や女君、侍女（は伺候名や童名）にいたるまでその呼称は、徹底して官職や居住地・邸、植物など喩的に語るのである。語り手であっても、実名を語るといふ行為は、古代の王が対象の名を「見る／知る」ことによつて国や個人を支配したのと同様に、その人物の人格を掌握・支配することに他ならない。実名を明かさないう喩による人物呼称は、物語空間や人物関係の語りによつて生き生きとした人物像を浮かび上がらせ、テキストや語り手に支配されない人物への〈読み〉を拓いていく（注21）。

上層伺候者は、主人と私的主従関係を基盤としているからこそ実名が明かされてし

まうのであるが、実名が明かされているという事実は重い。もちろん常に彼らは実名で語られるわけではなく、官職名や役職名でも呼称される。官職名で呼称される場合、個人としての人格ではなく政治的な男性社会の構成員としての語りの位相にある。人物呼称は、どのような名称が与えられるかによつて〈読者〉が抱く人物形象に大きく作用する。語り手によつて選ばれた人物呼称の〈ことば〉は、〈読者〉の個人的な体験（現実体験、同物語内での読みの体験）と結びつき、物語を読み進めることによつて生き生きとした人物像が〈読者〉の中で形成されていく重要な記号要素である。

人物呼称は、語り手の存在性とも大きく関わる。つまり、人物呼称から語り手の立場や態度、作中人物との距離感を読み解くことが可能である。『源氏物語』の語り手は、人物呼称には大変慎重な姿勢を示している。たとえば、物語の中心人物である光源氏の呼称については、世人や高麗人の命名だとするが、桐壺巻末の人物呼称に関しては「とぞ言ひ伝へたる」「となむ」とあるように、「光る君」に対し語り手は自身の命名によるものではないと間接的に語ることで、語り手さえも支配できない光源氏の存在を立ち上げるのである。物語世界と語り手の距離のとり方は、様々な表現によつて示されるが、桐壺巻末のような物語内世界に語り手を閉じ込めない語りの方法は、語り手と〈読者〉の共感覚を生み出す物語の方法と言えよう。

さて、『源氏物語』の人物呼称は、先行する物語が、「さるきのみやつこ、あべのみあらじ」『竹取物語』、「忠頼、道頼」『落窪物語』、「仲忠、仲頼、俊陰、涼」『うつほ物語』など実名を明かしていく語りの方法とは異なる。『源氏物語』に語られる男君や女君など人物呼称には、実名を語らない語りの方法が認められる。そこには、古来より相手の実名を口にするのを禁忌と考え、神や天皇の名を神聖、絶対の秘密とする名のタブー性が底流にあるものと考える²²。角田文衛氏は、女性、特に貴族の女性に実名敬避の風習が強かったことを指摘している²³。侍女たちの伺候名も男兄弟との関係性や続柄を把握しやすいという実利面以外に、実名敬避の風習が影響

しているものと考えてよいであろう。

ところで、自身の名を明かさない人物と言えは夕顔であろう。廃院へと連れ出された夕顔は「今だに名のりしたまへ」（「夕顔」一六二頁）という光源氏の問いかけに「海女の子なれば」と応えるだけで名は明かさない。そこには、単に名を知りたいという光源氏の好奇心だけではなく、「名のり」による相手の「魂の征服」という古代的精神性²⁴を読み取る必要がある。また、光源氏が名を問いただした理由は、女の名を知らないことが「心の中の隔て」（一六三頁）であり、「いとむくつけし」（一六二頁）と感じたからだと言う。「むくつけし」は、「ゆゆし」と同種のこの世ならざるものへの畏れやそうした存在を誘引する心情表現である²⁵。名を知ることができず女を支配できなかった光源氏、そしてその光源氏は「うちとけるさま」が「ゆゆし」と語られ、不穏な〈ことば〉と女の謎²⁶の綾によつて、夕顔はあの世へと魂を引き寄せられるかのように絶命してしまう。実際、夕顔がなぜ絶命したのかは語られていないが、光源氏が女の名と存在を支配できなかった（物語空間をも光源氏は支配できなかった）ことが、別のモノに支配されてしまった結果と解釈したい。

「名のり」を中心として考えた際、夕顔と同様の語りになっているのが浮舟物語である。中の君の邸に身を寄せていた浮舟を偶然目にした匂宮は、「今参りの口惜しからぬ」（「東屋」六〇頁）侍女と思い言い寄る。その時の匂宮は「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ」（六一頁）、「誰と聞かざらむほどはゆるさじ」（六二頁）と口にする姿はかつての光源氏よりも強い口調であり、同時に「むくつけし」と感じている匂宮の心情が語られる。その後の浮舟は、二人の男性への想いに彷徨した末に、入水へと導かれていく。男に名を明かさない女の物語は、得体の知れないモノに魂が魅入られ死へと向かう。夕顔物語と浮舟物語は、男に名を明かさない女の物語として交錯していく。

四、実名語り

ここで、受領層である惟光や時方など上層伺候者へと目を向けてみたい。およそ一〇〇名余りが語られる『源氏物語』のうち、実名で語られるのは六名だけである。そのうちフルネームで語られるのは一名だけである^{〔注27〕}。

実名で語られる最初の人物は、光源氏の伺候者である惟光である。惟光は、何の前触れもなく突如として実名語りがなされる。

六條わたりの御忍び歩きしのありのころ、内よりまかで給なかやどりに、大貳の乳母めのといたくわづらひて尼あまになりけるとぶらはむとて、五条なる家いゑたづねておはしたり。御車くるまい入るべき門は鎖さしたりければ、人して惟光これめ召めさせて、待たせ給ける程、むつかしげなる大路のさまを見はたし給へるに、…〔中略〕…おかしき額ひたいつきの透影すまかげあまた見えてのぞく。
〔夕顔〕一三五頁

語り手が突如として語る惟光という実名は、惟光が光源氏に支配された存在(伺候者)というだけではなく、〈読者〉にも支配された存在であることを示している。この実名語りには、惟光を使役する光源氏と〈読者〉の視点の共感覚を生み出す作用があると考ええる。そうしたことが端的に表れているのが、光源氏の叫び声である。名も知らぬ女の突然の死という異常事態に直面した光源氏は二度「惟光」の名を口にする(「夕顔」一六五・一六八頁)。光源氏が名を呼び、その窮地から脱するための記号こそが「惟光」なのである。「惟光」という実名には、不明瞭な呼称で語られる人物たちとは異なり、明確な実体が与えられていることで主人たちと読者を日常、安定した読みへと回帰させるのである。実名語りは、生活圏外や非日常空間へと足を踏み入れましたった主人の日常を保障し、〈読者〉に委ねられた読み(読みの可能性や愉悦)から安定した読み(読みの限定性)へと戻そうとする力がある。

ところで、作中人物の口によって名が明かされる男性伺候者は、惟光のほか時方、道定、平重經である。良清は、語り手によってその名が〈読者〉に示される。

時方の名は、主人の匂宮が三度口になっている。一度目は、浮舟との逢瀬で宇治逗留する言い訳として「時方は、京へものして、山寺に忍びてなむと、つきつきしからむさまに答へなどせよ」(「浮舟」一二六頁)と都への使者とするとき、二度目は、匂宮と浮舟の関係を知った薫が邸の警護を固めた後に「まず時方入りて、侍従にあひて、さるべきさまにたばかれ」(「浮舟」一八九頁)と右近と交渉はできなかったが、別の侍女である侍従を連れ出しに成功したとき、三度目は、浮舟の失踪後、「身を投げたまへるか」(「蜻蛉」二〇一頁)、「ほかへ行き隠れんとにやあらむ」(二〇三頁)、「にはかに亡せたまひにけれ」(同頁)と様々な情報が錯綜する中、「時方、行きて気色見、たしかなること問ひ聞け」(同頁)と情報の隠蔽や収集などに時方を使役する時である。浮舟に執心する匂宮の様子が「時方は」「まず時方」「時方、行きて」と語気を荒げた発言に表れている。男性伺候者の名を口にしての命令は、主従関係以上に名の支配による呪的な力が働いていると考える。当然のことながら、実名を口にしての命令は失敗することなく遂行されるのである。

次に、道定は匂宮の伺候者であるが、薫にその名を呼ばれていることに注目したい。〈我われすさまじく思ひなりて棄てをきたらば、かならずかの宮呼び取りたまひてむ。人のため後のいとおしさをも、殊ことにたどりたまふまじ。さやうに思おもへてむ。こそ一品宮の御方かたに人二三人参らせたまひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむ、いとおしくなどなを棄てがたく、気色見まほしくて、御文遣はす。例の隨身ずいじん召して、御手づから人間に召し寄せたり。道定みちさだの朝臣あそむは、猶仲信が家にや通ふ、「さなむ侍る」と申す。「宇治へは、常にやこのありけむ男は遣らむ。かすかにてゐたる人なれば、道定みちさだも思おもひかくらむかし」と、うちうめきたまひて、「人に見えでをまかれ。おこなり」との給。〔浮舟〕一七五・一七六頁

薫の随身の情報によって、薫は匂宮と浮舟が繋がっていることを知る。薫の心内では、浮舟が女一の宮の侍女として出仕させられるようなことを危惧しているものの、語り手によって「棄てがたく、気色見まほしくて」とやや批判的にその内心が暴き出される。そのような薫の心内と深層心理を暴き立てるような語り手のことばに続いて薫の発言がある。隨身に語る薫のことばには「道定」の名が繰り返される。匂宮の伺候者である「道定」の名を薫が口にすることは、道定の存在（情報や行動）が支配されていることに他ならない。加えて薫の隨身も「式部少輔道定朝臣」（二七三頁）と道定の名を口にもしていることも注目すべき点である。

しかし、それ以前に薫をよそおい浮舟のもとへと闖入した匂宮は、薫の伺候者である「仲信」の名を口にしていた（二三三頁）。匂宮もまた薫の伺候者の名を巧みに利用していたのである。匂宮と薫は、互いの伺候者の名を口にすることで物語の局面を拓いていくことに成功している（^{注28}）。自身の従者だけではなく、相手の従者をも把握しているという伺候者支配の複雑な関係に浮舟入水がある。

また、平重経は、唯一氏名が語られる人物である。実際には登場しないが、その名が意味を持った記号として語られる。浮舟に迫る匂宮に対し、侍女も乳母もどうすることもできない不可避な状況に陥ったとき、浮舟を救う存在が平重経なのである。浮舟の危機的状況下で母明石中宮からの使者来訪の知らせがもたらされる。匂宮は強気に「誰か参りたる」（東屋「六五頁」）と追い払おうとするが、「宮の侍に、平重経となん名のり侍つる」との返答にしぶしぶ都へと帰参するのであった。この文脈では、明石中宮の存在、病について論じられることが多いが、平重経という名にも注目すべきであろう。平重経が匂宮にとつてどの程度のかかわりがあるか語られないが、匂宮の好色を中断するほどの抑止力がそこには作用している。それは「侍」「平」という武力的な記号性があることも見過ごすことはできない。実名がもつ力を端的に表しているのが、平重経を語る一連の文脈であると言えよう。

不明瞭で不安定な人物呼称で語られる『源氏物語』において、実名語りの文脈は主人たちの主人たる都の日常へと戻し、縦の人間関係を創出していく。男性伺候者たちは、作中人物たちによって、そして語り手によって実名が明かされていくことで、主人にさらに〈読者〉に支配された存在として物語を駆け巡る。

人物呼称は、物語の流れの中で、そこで切り取られた物語空間に奉仕する形で語られ、物語のことばと対峙した者を場面の〈読者〉へと、そして物語の〈読者〉へと仕立てあげていく。人物呼称の変化は、新たな物語の側面の到来を我々に喚起し〈読み〉を駆り立てるのである。そこには新たな〈読者〉としての自己がすでに立ち上がっている。実名が語られることによって彼らを支配する〈読者〉が立ち上がることになるが、それと同時に掌握することのできない不明瞭で曖昧な人物たちがいることも痛感させられる〈読者〉も立ち上がってくるのである。

四、おわりに

これまで従者と呼ばれてきた存在について、体系的に捉えるべくこれまで従者と呼ばれてきた男性伺候者について考察を加えた。その際に、言霊信仰をもとに名の持つ古代的思想から作中人物に、そして語り手に名が語られることの意味について論じた。さらに、テキストが生起する「語り」「読み」「読者」ということにも注意してみたが、まだまだ論じ切れていない部分も多い。

今後は、男性伺候者と関わる「供」「供の人」「従ふ」「追従」などの表現からの読み解き、彼らが主人に対して漏らす「わづらはし」などの心情表現などについて論じていく予定である。

- (1) 折口信夫「女房文学から隠者文学へ」『古代研究VI』国文学篇2、角川ソフィア文庫、平成二十九年。
- (2) 玉上琢彌「女のために女が書いた女の世界の物語」『源氏物語音読論』岩波現代文庫、平成十五年。
- (3) 三田村雅子「召人のまなざしから」『源氏物語 感覚の論理』有精堂、平成八年。
- (4) 吉海直人『平安朝の乳母達——『源氏物語』への階梯——』世界思想社、平成七年。
- (5) 陣野英則『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版、平成十六年。『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』勉誠出版、平成二十八年。
- (6) 古田氏も指摘していることであるが、侍女という表現は、平安かな散文には見られない表現であるものの、女性伺候者全般を指す表現として意識的に用いた。女房は、侍女のうち局を与えられた上層侍女のことを指す。女房については、加納重文「女房と女官」『平安文学の環境——後宮・俗信・地理——』(和泉書院、平成二十年)に従う。
- (7) 松岡智之『『源氏物語』の「受領」をめぐる——物語作家紫式部の誕生——』『論叢 源氏物語2』新典社、平成十二年。拙稿「良清、惟光と大和の守——受領と夕霧の恋愛譚——」『源氏物語〈読み〉の交響II』新典社、平成二十六年。
- (8) 柳井滋「源氏の供人——主従関係の一面——」『古代文学論叢』第十一輯、武蔵野書院、平成元年。関根賢司「名Ⅱ記号のざわめき」家司・従者列伝『源氏物語宇治十帖の企て』おうふう、平成十七年。竹内正彦「野分吹く明石の町——『野分』巻における明石君——」『源氏物語発生史論——明石一族物語の地平——』新典社、平成十九年。中丸貴史『源氏物語』浮舟巻における情報と欲望構造——内宴と躍動する家司たち——『源氏物語〈読み〉の交響』新典社、平成二十年。
- (9) テリー・イーグルトン「現象学、解釈学、受容理論」『文学とは何か——現代批評理論への招待(上)』(岩波文庫、平成二十六年)では、テキストを生起させる読書実践を行う読者の重要性を説いている。テキストに内包することばに誘引されながら読む行為、読まされる行為によって立ち上がってくる主體的な存在を〈読者〉と位置づけ以下論じていく。
- (10) 野村倫子「女房と従者たち——浮舟巻」『源氏物語講座』第四巻、勉誠社、平成四年。熊野健一「源氏物語の従者——脇役の持つ意味」『源氏物語講座』第五巻、勉誠社、平成三年。「従者」『源氏物語事典』竹内正彦執筆、大和書房、平成十四年。
- (11) 『うつほ物語』の本文引用は、尊経閣文庫蔵前田家十三行本(『うつほ物語の総合研究』勉誠出版、平成十一年)に依り、心内表現は(へ)とし、私に改めた箇所は傍記を施した。また、便宜を図り、(へ)内には、室城秀之『うつほ物語 全』(改訂版、おうふう)の巻名・頁数を記した。
- (12) 『大和物語』の本文引用は、前田家尊経閣本(『大和物語評釈』等間書院、平成十一年)に依り、心内表現は(へ)とした。また、便宜を図り、(へ)内には、新編日本古典文学全集の頁数を記した。
- (13) 『枕草子』の本文引用は、『新版 枕草子』角川ソフィア文庫に依った。
- (14) 倉本一宏『御堂関白記』に見える「女房」について『むらさき』四十七号、平成二十二年。
- (15) 繁田信一『殴り合う貴族たち』角川ソフィア文庫、平成二十年。
- (16) 繁田信一「酒宴を楽しむ牛飼童たち」『庶民たちの平安京』角川選書、平成二十年。
- (17) 『源氏物語』の本文引用は、「浮舟」は明融本(『東海大学蔵 桃園文庫影印叢書』、東海大学出版会、平成二年)。それ以外の巻は大島本(『大島本 源氏物

語』角川書店、平成八年）に依り、心内表現は（～）とし、私に改めた箇所は傍記を施した。また、便宜を図り、（～）内には、新編日本古典文学全集の巻名・頁数を記した。

- (18) 「大夫の従者」は、麦生本のみ「大夫のむすめ」となっているが、「心も知らぬ」従者と「心知りの男」（次頁引用本文）を同一と捉えた場合（麦生本も「男」）。文意が通らない。

- (19) 注10 野村論文。

- (20) 神尾暢子「源氏物語 下人の表現機能」『むらさき』第四十七輯、平成二十二年十二月。

- (21) たとえば、「光る」という呼称は、彼の光り輝くような資質やこれから展開していくであろう王権譚を喩的に示しているが、物語を読み進めていくうちに「光る」という呼称の背後に潜む不義密通や須磨流離、最愛の女性に先立たれることでの苦悩と葛藤など多くの「翳」を抱えていく人物であることが明らかになっていくという人物呼称が持つ〈読み〉のおもしろさとして、河添房江氏の指摘は大変示唆的である（河添房江「光る源氏の命名伝承をめぐって」『源氏物語の喩と王権』有精堂、平成四年）。

- (22) 豊田国夫「人称の禁忌」『名前の禁忌習俗』講談社学術文庫、昭和六十三年。穂積陳重『忌み名の研究』講談社学術文庫、平成四年。

- (23) 角田文衛「呼び名・諱名・童名」『日本の女性名（上）』教育社、昭和五十五年。

- (24) 折口信夫「国文学の発生（第四稿）」『古代研究V』国文学篇1、角川ソフィア文庫、平成二十九年。

- (25) 多田智子『源氏物語』における「むくつけし」について『日本語の語義と文法』風間書房、平成十九年。

- (26) 陣野英則「『ものつづみ』する女の謎」『人物で読む『源氏物語』第八巻―夕

顔、勉強出版、平成十七年）では、夕顔という女性が光源氏からの視点や右近の推量によって語られ、その実態が謎であるとの指摘は卓見。

- (27) 「源氏物語作中人物人物総覧」『源氏物語評釈』（別巻二、角川書店）で立項された人物名は一一六五名であるが、一名に複数の呼称がある場合も含む。実名は、惟光49例、良清11例、時方11例、道定3例、仲信2例、平重経1例。平重経については、注8の関根賢司氏が論じている。

- (28) 宇治十帖の伺候者たちの暗躍ぶりについて、注8の関根賢司氏では実体よりも名に意味があることを指摘し「名のざわめき」と評している。

国文学科 講師（日本古典文学【中古文】）